

第1部 『中南米音楽』の時代

おはなし：中西 環江（聞き手：高場 将美）

『中南米音楽』は、1952（昭和27）年5月に、中南米音楽研究会 Sociedad del Estudio de la Música Iberoamericana——通称「セミ S.E.M.I.」——の機関誌として創刊されました。これを、会員のサークルを超えた雑誌にしたのが中西義郎（なかにし・よしお）さんです。中西さんは、結核の療養所にいたので時間がたっぷりあり（失礼）、以前に個人で出版社（！）をやったことがありノウハウを知っていたのです。そして、本を作って多くの人に読ませることに、愛と情熱をもっていました。

中南米音楽研究会から独立した雑誌（つねに密接な関係を保っていました）『中南米音楽』は、中西さんの熱意と努力で資金難や記事ネタ不足などの問題を乗り越え、1960年代前半には、マイナーな分野の専門誌ではありますが、世間に認められるまともな月刊誌になりました。現在の『ラティーナ』誌は、この直接の延長線上にあります。

いっぽうで中西さんは、アルゼンチン・タンゴ楽団の日本公演の、いわゆる「呼び屋」の仕事もはじめました。1965年に、労音のネットワークで、オスバルド・プグリエーセ楽団の全国公演を実現しました。8月末から12月末までの大ツアーでした。1970年のホセ・バツソ楽団で、「民音タンゴ・シリーズ」をスタートさせました。

また1960年代からアルゼンチンのLPレコードの輸入（とても少数）。本格化できたのは後年ですがアルゼンチン以外からもCDや民俗楽器・出版物などの輸入販売をしてきました。

中西義郎さんは1992年にブエノスアイレスで仕事を終えて日本に帰る空で、この世を去られました。

中西環江（なかにし・たまえ）さんは、その奥さんで、すべての実務に、ときには義郎さん以上にたずさわってきた方です。苦労も義郎さん以上にしていると思いますが、本日は、いやなことは忘れて（公表できないことも多々あるでしょう）、たのしくお話をさせていただきます。（高場・記）



● 1964年8月17日

↓ 1965年来日したプグリエーセ楽団のメンバーと。左から、ホルヘ・マシエール、フリアン・プラーサ（背中）、アルシーデス・ロッシ、アルトゥーロ・ペノン、加年松城至（かねまつ・じょうじ。初代『中南米音楽編集長』）



↑ ブエノスアイレス市立タンゴ・オーケストラの演奏会で。常任指揮者ラウル・ガレーロとカルロス・ガルシーア。

第2部 港町の酒場のうた

うた：峰 万里恵 ギター：高場 将美

1. でもわたしは知っている *Pero yo sé*

作詞作曲：アスセーナ・マイサーニ *Azucena Maizani*

●作者はタンゴ専門の女性歌手として最初の人で、1923年、21才でオペレッタ劇場にデビュー、翌年からレコードを録音してスターになりました。この曲は、28年の作品です。

夜になるとようやく、あなたは起き出して、一夜の愛人を探しに出かける。豪華なオープンカーのシートにゆったりと身を沈めた、エレガントな姿。

コリエンテス通りを、フロリダ通りをめぐって、ペルシャの殿様よりも優雅な人生。豪華なスケジュールが山ほどいっぱい……階級とお金で、あなたにはなんでも手に入るだろう。

こんなにアヴァンチュールいっぱい、こんなに遍歴して、あなたは人生をただ快樂にだけ向けてきた。

お金はいつでもあったから、気まぐれに欲しくなったものは、すべて勝ち取った。

あなたが、こともなげに見せびらかす、その輝きは、ただの仮面だということを、人々は知らない。あなたの愚かな誇り高さが、みんなをうまくだましている。あなたはだれにも知らせたくない。

でもわたしは知っている、あなたには愛の悩みがあることを、こんなに女性を取り替えながら、忘れようとしていることを。

わたしは知っている。夜明け前に酒宴をあとにするとき、あなたは胸が押さえつけられるのを感じることを。愛する思い出で……そして、あなたは泣き出すのだ。

2. ダンサ・マリーグナ (毒のある舞踏) *Danza maligna*

作詞：クラウディオ・フロッコ *Claudio Frolo* 作曲：フェルナンド・ランドレ *Fernando Randle*

●さきの曲の作者マイサーニがうたって大好評だった(1930年)、良き時代の妖しいムードいっぱいの曲です。作詞者(本名カルロス・アトウエル・オカントス)は、本職は判事で夜遊び好き、趣味として作詞家になりました。作曲者はピアニストで、ナイトクラブで、タンゴ以外の音楽(フォックストロットとか)を主に弾いていたようです。

やくざっぽいリズムが足を引きずっていく。タンゴは身をちぢめまた伸びる……その痛ましい音楽は、まるで、せまりくる脅威を感じているようだ。

わたしたちふたりは生きよう、ノスタルジックで毒のあるダンスの15分間を。ふたつの心臓のときめきを聴こう。アフロディーテのヴァーナスの神霊のもとで。

やくざっぽいリズムが足を引きずっていく。タンゴは五体を支配する。わたしのこめかみに掛かる、あなたのカールした毛が、わたしの臨終の終油の儀式になるだろう。

わたしはあなたを誘う。この神殿に忍びこもう。そこではすべてが浄化される。ふたりは15分間を生きよう、ノスタルジックで毒のあるダンスの15分間。

神々の快樂、倒錯の踊り。タンゴは儀式、そして宗教。この土地のオルケスタはその祭壇、司祭はバンドネオン。

わたしは捕らわれた自分を感じたい、わたしの痛みの牢獄に入ったように。黙ったままでいなさい わたしの魂の半分よ、ふたりのあいだには秘密があるのだから。



Azucena Maizani

3. エンビーディア (羨望) *Envidia*

作詞：ホセ・ゴンサーレス・カスティージョ José González Castillo /
セサル・アマドーリ César Amadori / アントーニオ・ボッタ Antonio Botta
作曲：フランシスコ・カナーロ Francisco Canaro / ルイス・リッカルディ (?) ¿Luis Riccardi?

●1935～36年に上演された、カナーロ制作・総指揮の音楽劇『タンゴの祖国』の挿入歌のひとつです。当時のカナーロ楽団の陰の音楽監督だった（公式にはカナーロ）ピアニストのリッカルディが、この曲を全面的につくったと推察されます。もちろん、カナーロの指示のもとに。作詞者に3人の名前が登録されていますが、彼らは劇の脚本家たちです。

エンビーディアを感じるのは悩んでいる人、全人生がただの夢だと知りながら待っている人。卑怯者、死んでゆく人、人を殺す人、傷つける人——彼らは許されることのないから。

わたしは正直者に生まれた。誇り高い頭を一度も下げたことはない。友にも敵にも手をさしのべた。そしてきょう、わたしの過去の冷酷な鏡に写る、変わり果てたわたしの姿、エンビーディアのせいで。

わたしは嫉妬ゆえにエンビーディアを感じる、あなたのそばで愛されている幸せな人を見て。眠れない夜の、敗北者のエンビーディア、人生でいちども夢ももったことがないから。エンビーディアが、この悩みといっしょに生きる罰をわたしに与える。愛ゆえのエンビーディアほど大きな痛みはない。

4. ポルトガルの水兵 *O marujo português*

作詞：ジョアオン・リニャールシュ・バルボーザ João Linhares Barbosa
作曲：アルトゥール・リベイロ Artur Ribeiro

●アマーリア・ロドリゲシュさんは、ファドというジャンルもポルトガルという国籍もはるかに超えた偉大な女性歌手です。この曲は彼女にうたってもらうために、ファド作詞の巨匠、すばらしい民衆詩人リニャールシュ・バルボーザが歌詞をつくりました。メロディは、本来は『レモン売りの娘ロジーニャ』というタイトルの、数年前のヒット曲を借用しました。メロディの転用・借用は、ファドではふつうのことです。この曲は、1950年が初録音です。



リスボンの「ファドの家」のひとつにて
(実際の照明は、もっと暗いです)



ポルトガルの水兵が街を通るとき、歩いていない。踊りながら通る。満ち潮、引き潮の味に乗っているみたいだ。

彼が体を揺らす、あんなやりかた、あんな大げさな動き。そうでもしないと区別できない、それは人体なのかボートなのか。

彼が通るとき、目立つ大きな襟（えり）。いたずらっぽいまなざしの中に、いつでも、塩の粒があるみたいだ。

心が曲がっている風に、水兵のベレエ帽をかぶってる。でも彼がなにか愛撫を發明したら、彼から逃げる女性はいない。

髪束はゴワゴワして、船の錨（いかり）をつなぐ綱にも使えそうだ。そんなのが魚売り女にはお気に入り。

ポルトガルの水兵が通るときは、いつも、海が通ってゆく。愛情深い潮の満ち干で、人をおびやかしながら。

リスボンに着くと、船から飛び出て、ひとつ跳びで波止場の隣のマドラゴア地区に飛び降りる。あるいは、そこから上ってパイロ・アルトに、丘を越えてアルファーマ地区へ入ってゆく。そして、アルファーマを船の甲板にしてしまう。

ポルトガルの水兵の中には、いつも必ず、大航海の冒険者ヴァシュコ・ダ・ガマがいる。

5. かもめ *Gaivota*

詩：アレキサンドル・オニール *Alexandre O'Neill* 作曲：アラン・ウルマン *Alain Oulman*

●これもアマーリアさんがうたうためにつくられた曲です（1961年）。ポルトガルの現代詩人の代表者のひとりが、独裁政権により投獄された牢の窓から見える空に向かってうたっています。アマーリアさんは、そんな裏の意味はまったく関係なく、詩をそのことばのままに表現しました。作曲者はフランス人ですが、リスボン生まれで、ファド伝統を深く尊敬した新しい歌曲を創造しました。

もしも1羽のかもめが、いま、その空に描いているデッサンに乗せて、わたしにリスボンの空をもってきてくれたら……。——今は、そこでは、まなざしは飛ばない翼。力をなくして、海に落ちてゆく。

かもめがリスボンの空を描いてくれたら、どんなに完璧な心臓が、わたしの胸の中で脈打つことだろう。わたしの愛よ、あなたの手の中で。わたしの心臓が完璧におさまることができた、その手の中で。

もしも、とあるポルトガルの船乗り、7つの海をさすらってきた男が——そんなことがあるかも——彼の発明したことを、わたしに語ってくれる最初の人になったとしたら。もしも新しい輝きをもった、とあるまなざしが、わたしのまなざしに結びついたとしたら。

どんなに完璧な心臓が、わたしの胸の中で脈打つことだろう。わたしの愛よ、あなたの手の中で。わたしの心臓が完璧におさまっていた、その手の中で。

もしも、人生にさようならを言うとき、空の鳥たちのすべてが、お別れに、あなたの最後のまなざしを、わたしにくれたとしたら。——ただあなただけのものだった、そのまなざし。わたしの愛よ、最初のひとだったあなた。

どんなに完璧な心臓が、わたしの胸の中で死んでゆくことだろう。わたしの愛よ、あなたの手の中で。わたしの心臓が完璧に脈打っていた、その手の中で。

6. ハシント・チクラーナ *Jacinto Chiclana*

詩：ホルヘ・ルイス・ボルヘス *Jorge Luis Borges* 作曲：アストル・ピアソラ *Astor Piazzolla*

●アルゼンチンを代表する文学者として世界的に高名なボルヘスの詩に、今日のタンゴを創造したピアソラが作曲。ただしうたわれているのは19世紀のブエノスアイレス（まだ「大草原の大きな村」だった）なので、草原の吟遊詩人の物語歌ミロンガのスタイルを使っています。1965年発表。

バルバネーラ地区は、国会議事堂、いまはショッピング・センターに再開発されたアバスト市場、ユダヤ系の衣類商店街「オンセ」を含む、ブエノスアイレスの中核的な区域。



バルバネーラ聖母教会のふたつの塔。19世紀には、境内の中庭が決闘の名所だった（残念ながら愛のためというより、主義主張ゆえの決闘でした）

わたしは覚えている、バルバネーラ区でのこと、遠いある夜だった。だれかが気づかずに落としていった名前、ハシント・チクラーナとか言っていた。

またなにか人の噂にもあった。ある街角のこと、ナイフひとつのこと。それ以上のことは、年月があいだをへだてて、もう見せてくれない。果し合いとナイフの輝きは、いまは見えない。

どんな理由があるのか見当もつかないけれど、その名前がわたしを探し求めている！ わたしは知りたいものだ。ハシント・チクラーナという男はどのような人だったのだろう。

わたしの目には背が高く見える。そして本物の男、思慮深い魂の持ち主。声を高めないでいることができる、そして命を賭けることが。

だれも、彼よりもしっかりと地面を踏んでいったことはないだろう。だれも、彼のようなものはいなかったろう、愛において、そして戦いにおいて。

小さな果樹園ひとつと中庭ひとつの上に、バルバネーラ教会の塔たち。そして、あの、ありふれた「死」——どこにでもある街角で。

7. 下町のロマンス *Romance de barrio*

作詞: オメーロ・マンシ Homero Manzi 作曲: アニバル・トロイロ Anibal Troilo

●1940年代の新鮮なタンゴ創造を代表する詩人と、バンドネオン奏者・楽団リーダーのつくった、ブエノスアイレス風味のワルツです。

最初は遠い4月（ブエノスアイレスでは秋たけなわの季節です）のデート、あなたの暗いバルコニー、あなたの古い庭。その後は、熱い文字の躍る手紙。「ノー」と嘘をつき、「シー（はい）」と誓い……。

下町のロマンス。あなたの愛、わたしの愛。はじめは好きな気持ち、そのあとは痛み。愛が壊れたことの罪は決してわたしたちのものではなかった。でもその罪ゆえに、わたしたちふたりは苦しまなければならなかった。

きょう、あなたは、たぶんわたしを軽べつしながら生きているだろう——あなたをもつことのできないわたしが、忘れるすべを知らない痛みを嘆いているとは夢にも思わないで。

きょう、あなたは、今までにないほど、わたしの遠くにいるだろう。わたしが、こんなに泣いていることから遠くに。

なるようになってしまった。あなたもわたしのようになり、失意で目が見えなくなってしまった。さようならの恨みゆえに、あなたもまた冷酷にあなたの心を罰していることに気がつかず……。

なるようになった。とつぜんわたしたちは考えることができなくなった。あきらめて別れてゆくほうが、たやすい、忘れられずに生きてゆくことよりも。

8. あの通り *Aquela rua*

作詞: ジョアオン・リニャールシュ・バルボザ João Linhares Barbosa

作曲: ジャイム・サントシュ Jaime Santos

●ふたたび「ファド詩人」が、アマーリアさんのために書いた歌詞（1950年代）。作曲者は、ポルトガル・ギターの名手です。

わたしに、その通りの話をしないで。あの通りは、わたしにとっては、いちばんきれいな通りだった。いまだに。

そう、あなたは黙っていてくれたほうがいい。わたしに 今日時間のことを話すなんて！ 過去形ではわたしに話さないで。

あの幻影の時代、わたしは素朴な白百合のように、小さかった。月の光のように純粋。わたしは美人の娘だった、その通りの始まりから終わりまで。

学校へ行くための、小さな四角の模様の青い上っ張り、リボンとレース付き。きょうわたしは、ほかの道をたどっている。わたしは、あなたの両腕を鳥かごにしてみました。

わたしのもっていた楽しい歌たち。はやりだったそんな歌しか、わたしはうたえない。——見てごらん、悲しいやもめさん、回って歩いてる、泣きながら歩いてる。

わたしは、あの噴水の妹だった。あの正面にあった噴水。わたしは、ベラベラしゃべることを覚えた、噴水といっしょに。でも、あとですべては変わった。なぜなら、ある日あなたが通り過ぎたから。あなたが通り、泉は枯れた。

わたしの小さな土の水つぼ、変なおもしろい形のつぼ。なるようになったんでしょ、割れてしまった。あなたはわたしを、あなたのものと呼びながら通った。そのときから、もう、わたしは踏んでいない、あの通りの石たちを。

わたしにあの通りの話をしないで……。

9. 黒い舟〔暗いはしけ〕 *Barco negro*

作詞: ダヴィッド・モウラオン=フェレイラ David Mourão-Ferreira

作曲: カコ・ヴェリヨ Caco Velho/ピラチーニ Piratini

●リスボンを舞台にした1955年のフランス映画『過去を持つ愛情（原題：タイジュ川の愛人たち）』（監督：アンリ・ヴェルヌイユ、出演：フランソワーズ・アルヌール、ダニエル・ジェラン、トレヴァ・ハワード）に使われ、『ファド』というジャンルと、うたったアマーリアさんの魅力を世界的に知らせることになりました。

原曲は『黒い母 *Mãe preta*』というブラジルの曲で、主人の白い子どもを育てる黒人奴隷の老女をうたっている。

まず、ファドが生まれたころ（19世紀前半）は、ブラジルのリズムやメロディの影響が大きかったという研究家は多いですが、『黒い母』では映画の状況にまったく合わないので、ポルトガル現代文学者・詩人でアマーリアさんの崇拝者だったモウラオン=フェレイラが、まったく新しい歌詞を書き下ろしました。

（なお、映画は、愛人殺しの過去を背負ったフランス人男女が、リスボンで結ばれ、別れる宿命を物語ります）

朝、どんなに不安だったことか、あなたにわたしが、みにくく見えたらと！ わたしはふるえながら目を覚ました、砂の上に身を横たえて……。でも、すぐにあなたの目は、そうではないと言った。そして太陽が射しこんだ、わたしの心のなかに。

わたしは見た、その後、岩ひとつ、十字架ひとつ。そしてあなたの黒い舟は、光のなかで踊っていた……。わたしは見た、振られているあなたの腕、もう綱を切り離された帆のあいだで……

浜の老女たちは言う、あなたはもう帰ってこないと。彼女たちは頭がおかしいんだ！ 頭がおかしいんだ！

わたしは知っている、こいびとよ、あなたはまだ出

航もしなかったことを。だって、すべてが、わたしのまわりで、あなたはいつもわたしといっしょにいると言っている。

窓ガラスに砂をぶつける風のなかに、うたっている水のなかに、消えかかった火のなかに、寝台のぬくもりのなかに、からっぽのベンチの上に、わたしの胸のなかに、あなたはいつも、わたしといっしょにいる。

ああ……ああ……

わたしは知っている、こいびとよ、あなたはまだ出航もしなかったことを。だって、すべてが、わたしのまわりで、あなたはいつもわたしといっしょにいると言っている。

10. ラ・ビオレータ *La Violeta*

作詞：ニコラス・オリバーリ *Nicolás Olivari* 作曲：カトゥロ・カスティージョ *Cátulo Castillo*

●作詞者は、ルンファルド（ブエノスアイレスの隠語・スラング）による詩人として有名なジャーナリスト・劇作家です。作曲者は『たそがれのオルガニート』などの作者で、後年（劇作家・作詞家だった父の死後）作詞家になり、その分野でも豊かな才能を発揮した人です。

ブエノスアイレスのイタリア移民たちが愛していた民謡『エー！ ラ・ヴィオレッタ』を使ったこの曲は、ふたりでイタリア料理店で飲んでいたとき即興でつくりました。1929年発表。

垢のしみこんだテーブルに片肘をついて、視線は、とある夢に釘付けになって、イタリア男ドミンゴ・ポレンタは考える、彼の移民のドラマのことを。

そして汚い居酒屋——その店は古い故郷のノスタルジーをうたっている——、そこで調子はずれにうたう彼のしわがれたのだ、もうカルロン・ワインで焼けた

のだ。

遠いふるさとのカンソネータ、それが、きたない飲み屋を理想境にする。そして、歌はイタリア男の両目に輝く、なにかの涙の真珠とともに。

彼がその歌を覚えたのは、ほかの人たちといっしょにやってきたとき、船のお腹に閉じ込められて。そしてその歌で、酒場を騒がせ、彼はみずからの失意をなぐさめる。

「エー！ ラ・ヴィオレッタは行く、行く、行く、畑仕事に行く。彼女は夢に見てきた、そこで彼女のジンジンが、彼女をずっと見つめていたと……」

彼もまた自分の夢見る幸福を探している、もうこんなに遠くなったあの日から。あとき彼は夢を荷物にして出発したのだ、行くビオレータのように。

ごいっしょに時間をすごしていただきありがとうございました。
またお会いするのを楽しみにしております。
今後どうぞよろしく。

企画・選曲：峰 万里恵
プログラム作成：高場 将美

●峰 万里恵ホームページ <http://mariemine.web.fc2.com/>